

被服構成学の生成

— 史的考察への試論 —

福 山 和 子

- 序
- 家政学における被服構成学の現状と位置
- 被服構成学の主体的及び手段的生成論

序

被服構成学の発展に関しては、その発展の現段階において理解される「被服構成」なるものがそれ自体いかなるものであるか、それに現段階にいたるまで、どの様に生成し、また進展していくかについては、それら全体をつらぬく原理を究明していく必要がある。しかし発展論は実際の文献についてみてもきわめて多岐であり、何よりも現下の家政学における「被服構成学」の考え方が必ずしも明解でなく、またその生成発展の考察もいろいろな角度から説明せられ、さらに将来の進展動向の把握のごとくはむしろまったく閑説せられない場合が多い。他の諸科学におけると同じく家政学にもこれを研究する立場ないし観点の相違によって各種の学派が存在する。そして家政学の研究対象及び方法についても各学派ごとにそれぞれ異なった規定がおこなわれこの点に関する統一的な観方をすることは必ずしも容易ではない。しかしこうした研究対象及び方法に関する多様な規定にもかかわらず家政学が何らかの意味において家政の実践理論の解明を課題として成立したものであることについては異論がないであろう。今日の我国における家政学の現状を顧り観る時、果たして家政学が家庭生活の現実的要請にこたえるに充分な理論体系を有し、真に家庭運営のより所となるべき実践理論を提供するに至っているか否かについては大きな疑問をもたざるをえない。何故ならば家政学が真に家庭運営のより所

となるべき実践理論を提供しうるためには、単に家庭指導ないし家庭経営管理作業の遂行に役立つ各種の技術を個別的に問題とするのみでは充分ではない。それらが役立てられるべき家庭の目的及びそれに類する集団の目的との関連において判定すると共に合理性を有するものと判定された各種の技術を全体的に体系化するため基礎理論こそが解明されるべきであるにもかかわらず、我国の家政学研究の多くはその一部の業績を除いて必ずしもこうした意味における実践理論を意識的に解明しようとしているものとは考えられないからである。むしろ多くの場合、あたかも家庭運営に役立つ各種の技術ないし理論・制度に関する個別研究こそが家政的固有の課題であるかの如く解されることによって家政学の体系とそのすむべき方向をいちじるしく混乱させ家政学を、ある意味における方向喪失の状態におとし置かれているように思われてならないからである。被服構成学はしばしば単なる「技術論」にすぎないものと解されているが、各種の構成技術に関する個別的理論が被服構成学にとって無意味なものであると考えるものではない。むしろこうした個別的理論の有する価値を積極的に肯定し、被服構成学が各種の家政管理技術に関する個別的理論を無視しては成立しえないことを強調すべきであろう。しかし、それにもかかわらず、我々は一見きわめて実践的に役立つかにみえるこれら個別的理論がそれのみではけっして真の意味における被服構成学の合理的遂行の基礎理論たりうるものではないことを認め、さらにこうした個別的理論を被服構成学個有の体系理論にまでねり直すことによって初めて真の意味で家政学における

実践理論たりうることを強調しなければならない。

家政学における被服構成学の現状と位置

- 被服構成学の範囲
- 交錯領域
- 理論と技術の関係

被服構成学は衣服に関する実践技術理論の学問である。被服構成学は用語からすでに考えられるように被服構成技術と構成理論の区分が必ずしも明解でない。初期の家政学においては裁縫・料理がすべてであり、経験によるパターンの継承であった。であるから被服構成学は和裁・洋裁等の縫製技術であった。この意味での被服構成学は縫製技術としてのものであった。現代家政学においては縫製技術を理論で裏付けられた技術として観るのであるから科学と技術の融合体としての被服構成を考えなければならない。それでは家庭生活にとって、これからどんな意味を有し、また地位にあったかについて考えておく必要がある。それは技術であるとき、家庭の構成員の誰かの役割であり、社会機構の変化等によりある種の機関が一部または相当範囲を担当するようになる。家庭においてはその発展のいかなる段階にも被服構成に類似した仕事は存在していたのであり、これを誰かが遂行していたのであるがただ発展論からみて問題になるのは、1. いかに行っていたか、2. これが果たして後に専門技術者によって担当せられねばならぬ存在意義と地位を被服構成上から観ることが大切である。初期には被服構成理論がほとんど課題としていなかった。これが家庭及び家政学の発展につれて、きわめて重要な位置をしめるにいたったのは被服縫製技術が専門化し理論づけせねばならない段階に達したのであり、家庭を対象とする家政学において、その分野が鮮明化し被服構成理論及び技術の目的が明確になったためといえよう。更に結論的には縫製技術の発展がやがて理論的裏付けて必要なまで進展したとき技術の立場を主体としながら側面である理論に重心がおかれる被服構成学

でなければならない。これは創意・計画・構想の初期の発想的計画段階から縫製管理の技術的理論的段階、更に着装による美的・機能的段階まで科学実践技術理論という多面的性格を有しているが、被服構成学の内容を分析する場合、常に科学的構成技術という点を中心に行なわなければならない。そこで、その内容は次の基本過程にわけることができる。1) 計画——何をなすべきかをきめることがこれである。ここでいう計画とは、デザインの決定、材料、着用目的の決定、作業内容・実践方法の計画、更に日々の計画の確立など含めた広範囲な決定計画事項である。2) 構成要素の準備——1)の計画構成の目的遂行のために必要な材料・諸施設・機具等を確保準備する。3) 縫製の子備作業——縫製技術の目的遂行のために必要な採寸、カッティング、印入れ、仮縫い等の子備作業。4) 縫製作業——和裁・洋裁・手芸等の構成実技作業。5) 着装、反省、管理——構成作業の実施結果が所期の計画にほぼ一致しているか否かの確認及び作品の着装・管理。これらの基本過程を科学的に目的を達成し、更に分析・応用・研究するのが被服構成学である。被服構成学に関しては種々論議されてきたがその多くはいずれも一つの構成技術にのみ偏ったそりを免れない。この技術目的達成には科学理論及び科学技術理論をのぞいてはできず他科目との交錯領域の面が多い。例えば、縫製作品において、その使用繊維の破断強度・破断伸度・防しわ等々被服材料学の面の研究がなされていなければならない。更に、採寸等の人間工学の面、機械器具・繊維工学等の工学面の専門科目と、前記のような被服材料学、被服衛生学等の被服系専門科目との間に接し、多科目にわたり交錯している。被服構成学はその性格上技術が中心であるが、その技術は科学的裏付けに立脚した理論が背景になっていなければならない。例えば、製図に必要な身体計測におけるゆるみの寸法決定の場合、洋服における胸部・背部のゆるみ寸法は上半身の動作及び上肢運動に影響するところが多い。そこで経験的技術者はその着用目的に応じ

被服構成学の生成

て経験的数字をパターンに記入する。しかし胸囲寸法は呼吸の状態・上半身の動作によって変化し、それを正確に計測されていなければならない。直立正常姿勢で背幅と胸囲線の位置に標線をつけ採寸し、つぎに30°、120°前屈身した場合の各々の寸法を計測し、その差を求める。更に両上肢の水平拳の場合の胸囲線の移動等を正確に計測し、そこからより適した胸囲のゆるみ寸法が算出される。このように理論的裏付けは数多くの実験計測による結果から成り立ち、それが製図成作の技術にみちびかれるものでなければならない。

被服構成学の主体的及び手段的生成論

- ・主体の発展に着眼するもの
- ・手段の変遷上の特徴に中心をもってくるもの
- ・社会的状況の変化に着眼するもの

被服構成学の発展論として考えられる種々な観方は次の如くであろう。

その第一は主体の発展に着眼するもので、被服構成の材料・着装構成の立場から論じようとするもの。第二は手段の変遷上の特徴に中心をもってくるもので被服構成の手段及び技術理論の変遷を論じようとする立場。第三として、社会的状況の変化に着眼するもので、歴史的・社会的変化——客観的状況の変化による発展に着目するものなどが挙げられる。第一の方法は更に1) 被服材料の発展の角度から被服構成の発展を論じようとするもの、2) 衣服自体の型・構成・着装形式の発展・視覚から論ずるもの、3) 被服経済の角度からのべる。第二の立場は1) 科学的構成法の発展の立場から被服構成の発展を論ずる。縫製という技術・作業を経験的構成から科学的理論づけのある構成へと進展させる縫製技術面。2) 手段の視角であるが技術的な面ではなく人間工学及び力学等の実験理論的観点からする被服構成の生成発展論。3) 被服構成を機械的操作の面からみる発展論。4) 社会的面から機械的大量生産と縫製技術の合理化の角度から発展論を論ずる。第三の立場は

1) 被服構成の発展を社会的・歴史的立場からその発展とくに将来の進展を論ずる。2) 社会体制・経済体制の基礎の相違によって被服構成自身の性格の変化に着目し、またその変化発展に即して被服構成の発展を論ずる。3) 戦争と被服構成、あるいは家政学との関連をのべるもの。文献はけっして多くはない。家政学は第一次世界大戦後にその基礎が築かれ第二次世界大戦後現代家政学として発展をとげた。

このように我々はいろいろな面で被服構成の発展論が展開されるを見る事ができる。被服構成学の発展を正しくとらえるには、これらすべてを的確にとらえ、有機的に関連づけられねばならぬ。これを単に、その一面にすぎない所の科学的構成技術の手段面の発展だけを説明しただけでは決して被服構成学を正しく論じつづけない。これらすべての面の有機的な関連を考え全体としての被服構成学の発展をとらえる必要がある。被服構成の内容は発展し変化する。すなわち被服構成の性格は社会・経済の変化によってだけでなく、それ自体の主体的な構成技術・内容・材料等の変遷・発展により著しく変化しているものとみる。

衣服の発生は社会的・個人的要因によるもので、狩猟・漁撈中心における衣服は簡単な獣の皮あるいは野性の植物から裂地をつくり寒さをしのぐという自然な衣服生活をしていた。初めは手当たり次第あらゆる野性植物から繊維をとろうと試み、結果として衣料に耐えうる強靱な繊維をもった楮・科・桑・大麻・蕁麻等が選ばれるにいたった。更に定着農耕が始まった弥生時代になると遺物の布巻具などから判断して一定の幅の裂地の存在がうかがわれる。布巻き部から当時の布幅は12~13匁、25匁前後、50~60匁の三種類であることが結論として出され、布は平織りで幅が広ければ貫頭衣、25匁位ならば横幅衣とすれば適当でなかったかと思われる。この様な裂地を背景として被服構成は構幅衣と貫頭衣の原始衣服形式を生みだした。横幅衣は二幅の衣をつづり合わせて首と両腕とを出したに

すぎず、少しは縫ったようであるが裁縫したというのではない。貫頭衣の場合是一幅の衣の真中に縦の裁ち目をきって頭を貫き、両脇をつづり合わせ、その合わせ目の上をあげて両腕を出した、このように左右の両脇や前身・後身の真中などは合わせ目を編む技術によって綴り合わせていたと思う。魚や、獣の骨を針に使ったりして裂地を綴り合わせていたとすれば縫う程ではないが構成技術がここに生活の必要性から生まれてきたことがうかがわれる。

その後日本の被服構成は中国・朝鮮の影響を受ける。これは日本が中国・朝鮮との国交をはじめ、社会体制・経済体制等中国の模倣となり、新しい繊維の伝来と共に、新しい中国・朝鮮の着装形式及び構成・縫製技術の伝来があり、中国化・朝鮮化の一途をたどった。古代支配階級による国家形成の歴史は同時に、日本における絹の伝来と養蚕・製糸・絹織技術発達史であり、絹は旧来の樹皮・草皮繊維にくらべて強さでは劣る反面、糸は細く布は柔らかく光沢にとみ支配階級の奢侈的衣料品であった。しかし本格的な大陸技術の移殖は四世紀末以後のことである。それが朝廷の命によって全国農民に強制され糸は現物貢租として徴発され、織物技術も中国帰化人の技術をそのまま生かし、日本独自の趣味が織物の模様につくり出されたのは平安朝の中期になってからである。中国伝来の織物技術のもとで縫製技術は北アジア系の胡服をとり入れ、布帛織物で衣服を製作するようになった。原始服は縫うことはあったにしても僅かであってほとんど縫っていないものであった。それがこの時裁縫技術が伝えられ布帛織物で衣服を製作するようになった。弥生時代になって農耕と共に居坐機で織った織物を用いて原始衣を製作していた。しかし刀子で布帛を裁ち、金属の鍼（針）で縫うという技術は高度の文化であった。獣皮を人間に着せるということは当然に思いつくことで獣類の生態を利用して工夫することである。ところが布帛は織り上げると方形でこれをもって人間の姿体に適合するように構成することは難しい。これを発見して考案発

明したのが漢民族でその一応の完成が深衣であって体に適合して着装し、それによって生きた人間の動く姿をみせるということはもうすでに精神的にもそれだけ自覚をすすめ、反省を加えて社会的にも高い文化生活を営んでいることになる。埴輪・土偶の服飾は上衣は袖は細くて腕につき、両脇は身について腰のあたりの下端は広がっているように曲線が多い。布帛の衣服とすれば漢人の深衣の裁縫が基礎にならなければならない。であるから、布の直線的裁縫を用いながら何か全体に梅妻的な曲線が残されており尺度制的なものでなく着用者に合わせた豊かな曲線のものとなり、袴は絹地のものは絹布二枚を幅49.1厘一杯に縫い合わせ長さは101厘であるが真中に襠がある。裳の多くは縦に縫い合わせたもので襷は明らかでないが裁断技術と縫製技術の基礎は確立される。

飛鳥時代に入ると朝鮮半島をへて輸入された文化を土台に隋の文化に直接影響をうけ、政治・文化・宗教の各方面にわたって大陸文化が支配した。服飾面は上層部にかぎられたものであったが、新しい変化がみえはじめた。奈良時代に入って唐文化の影響をうけ、唐文化を通じてインド・ペルシャ等世界文化の余波をうけるようになる。唐の影響は爵位六十階や養老律令にも服制が定められるようになった。飛鳥時代の服装形式は古墳時代の形式を基本として大陸風な装飾がつけ加えられるようになり、褶・裊等の新しい着衣が加わるようになる。更にこの時代の服飾は高句麗・百濟、あるいは新羅などの半島系胡服で、中国王朝の制度を直接にうけたものでなく北方系のものでしたの服の系流であろうと思われる。服飾というものはその用具としての物体とか人間が着装するとかいうだけでなく、社会的関連があってその方に問題が多いのである。この時代庶民にいたるまで服飾が問題とされるところに当時にはおそらく生活文化の全般に向上すべき要求があったことが想像できる。奈良時代の衣服は唐文化の模倣期であるこの時代の特色をあらわしている。そこで前時代の二部式の他に袍・位襖などのものが加えられ、

これに袴には括り緒褌等が現われ、領の純(縁)がエリ(襟・衿)となり、袂(袖)に標褌が付けられ奥袖と端袖とができた。するとタモト(手本)とソデ(衣手)とが分化し構成内容が複雑化し裁断と縫製とに新しい技術上の発展があった。これは構造上の発展でもある。袴には両脚を覆う、裾とか襷(ともに袴の筒)とかを連結する方法にいくつかあり裾のとり方等が工夫され、二つの裾を袴腰につけただけのものもあったし、このつけ方にもいくつかの方法があった。他に、括緒とか縛口というものもできた。ここに六朝以来、中国の裁縫技術に袴の発展が思われる。このような複雑な構造と華美な服装を生かすために織物はモチーフ自体が豊満肥大化した。模様は唐花文のみならず主副の別が明瞭さを欠き主文が小さくなって副文が大きくなり、さらにその間地に他のモチーフをおさめて装飾性と多彩よりも文の種類増加におきかえた。平安時代になると日本の服飾構成を背景として温雅な花鳥にみる自然なおもむぎ、なだらかな曲線には唐花文のかたい構成から、和様・花文への移行を示している。

平安時代に入ると前期は奈良時代の伝統をうけて唐制模倣の風が強く、位色の変化・袖口寸法等部分的な修正はあったが基本的形態は変わらない。奈良から京都に都をうつすことによる窮迫した財政の建てなおしが考えられ、装身の簡素化が唱えられた。そこで身分の高下をとわず長い裾の衣を着用しないように布告される。しかし勢力をもつ貴族達の宮廷生活は日本的束帯・唐衣裳の服飾形式を生み出した。そこで別の被服構成法で材料を豊富に用いることで貴族意識を満足させ、当然貴族達の立ちふるまいを優雅にさせるゆるやかな服装を発達させた。この豊かな量感に調和させるために髪を結んで圧縮するよりはゆるやかにたらしめてその量感を最大限にうったえるようになる。当然構成内容から装身具を飾る場所がなくなり重ね衣による配色に新しい感覚を求めようになる。平安時代末になると束帯は形式的に形が整えられ、その一つの現われとして裂地に強い糊を用いて角々

しく仕立て上げる強装束ができた。更に強装束を強調するために裾なども外側へ張り出して、ありさきの仕立てが生じてくる。重ね着などにより、単の重ね仕立てが生まれ、他にひねり仕立、おめり等の新しい縫製技術を生み出した。

庶民の衣服生活は衣服発生の形をそのままにのこし、筒袖の衣を着用し、狩り袴をつけ、わら靴をはいていたが、更に貧困者は手なしという袖なしのごく簡単なものを着用していた。これは経済的貧困が、そのままの形式をとどめたと同時に日常の労働活動にこの形式が適していたともいえる。庶民は租庸調の税制により布幅は庸は麻布で長さ1丈4尺、幅2尺4寸、調の場合、施は長さ1丈5尺、幅1尺9寸、布で納める場合は2丈8尺、幅2尺4寸を納められなければならなかった。絹類は官人から下働きの者達まで支給された。絹の袍であれば半疋、袷一疋、単の布袍は長さ1丈6尺、幅2尺4寸が、袷は単の倍の分量が支給された。官人には布の支給はあるが庶民は納税のために布を織っていた。

貴族政治の弱体化にともない地方豪族の勢力を地盤とする武士階級が政権担当の座につき鎌倉時代になる。そして京都の伝統的貴族文化を範としながら次第に独自の性格を見せて武家文化を発展させていった。

古代貴族政治の没落とともに古代織物業はいかに変わっていったか、古代絹織物の独占的な大量消費者であった皇族・貴族の奢侈的生活の没落によって需要がまったく失われた。古代の絹生産は全国的な強制労働の集積から成り立っていたが中央権力の弱体化につれて絹生産労働への強制力も逐次なくなり農民の備後労働や調べを行なわれなくなり絹生産はやむこととなった。このことは民衆にとっては解放であった。強制労働をつづけているかぎり技術は一定の水準を守っているにとどまり、それ以上に進歩はなかった。直接生産者にとって新機軸を工夫することは望まれもしなかったし許されもしなかったからである。強制力がなくなると同時にその一定水準の技術もすてられてしまった。これ

は絹織物の生産量の減少および高級織物生産の停止という点でいえば退歩であるが、生産体制がきりかえられることによって中世は近世における技術発展の基礎をつくったのである。中世と古代の生産体制の変化は絹生産及び技術の地方分散を起し、生産体制の変化によって絹織物・麻織物が商品として売られるようになり、織物生産者が独立した手工業者となっていくたのである。このような織物生産を背景に衣服は武家の生活に直結した構成を形ちづくっていった。武家中心の社会は、戦いを中心とする兵馬の生活と同時に武士の精神が成立した社会である。故に戦いのための装として鎧・甲冑などの武装・武具の発達をうながし更にその武装のための下着装として鎧直垂等の直垂の構成が生まれてくる。公家服の構成は徐々に簡素化の傾向を示し、女子の公家服も構成の簡素化の傾向が強くなる。更に小袖が発達しはじめ優美なものより簡素にして実用的なものへと移行し服装構成の近代化がみられる。庶民階級の衣服もその社会的地位の改善により、手工業の発達にともなって徐々に向上の機運を見せ、一般男子は素襖系統・括り袴、一般女子は小袖の上からもう一枚衣か小袖をはおっている。労働者は小袖の上に簡単な裂地をまいてのが普通である。鎧直垂は鎧下の着装であるから同じ直垂系のもので機能的仕立てになる。平安時代に同じように狩猟を目的とする機能的着装として狩り衣はあったが装飾的領域を出ていない。狩り衣は袖に括り緒がついているが袖そのものは広袖である。袍衣の裾はほとんど袴の外に出して着大迫物などには袴の内へ入れる程度の丈で、共ぎれて幅1寸5分の腰帯をしている。鎧直垂は袖口1尺2寸の筒袖で括り緒がつき、袖口をひきしめ動作を便ならしめる。胸紐・菊とじがついている。菊綴りは縫い目の綻びないために紐や革を縫い目をまたがせて結び止めたのである。室町時代以後は単なる装飾となる。平安時代と同じ系統を組む直垂・素襖・長絹は奴袴は長袴が中心となる。束帯が義礼服としていたが、直垂・素襖が儀礼服となると実用性と荘重美のた

めに長袴となる。

室町時代に入ると袴装束が構成される。これは更に続く戦国時代にあわせ着装形式が簡略化されてきたためと、より日常生活を機能的にするために構成されたものと考えられる。袴装束は両肩のひだの水平線が強いアクセントをもち、またこの線はひろがった裾の線と上下相呼応しており、中央腹部の袴のむび目には肩衣と袴のたて線が集中して、ひとつの中心部をなし、前者の横線に対し簡けつ端正な直線の構成美をしめしている。これにあわせて構成技術として新しく肩衣の製作がされるようになる。鎌倉時代からの水干の襟は首上になって、襟をとめるひもの一つは後身の中央について襟を内におりまげて垂領に着た時に都合のよいようになった。縫製上で袖つけ、襟つけなどの所々に菊綴りがつく。これは水干が簡単な労働着であったことを示している。更に上衣を袴に着込むのは動作に便利であり菊綴りは衣の袖つけ等の裂目を丈夫にする為の名残りともみられる。女子の裳が着装形式から脱落したことは広袖が小袖にうつる大きな転換である。また湯まき等ができたのは、御湯殿に奉仕する女房がつけた実用的なものを腰全体に巻くというのは実用性に関心をもたれたことである。

武士は舶載の蜀江の錦等着用し華美な服装をするものがたえずはでに見栄をはる伊達者のおごったふるまいは身分の上下をとわず高級織物の需要をさかんにし織手・座の出現をみ、京都を中心とする機業の隆成と織物業者の活動がめざましくなる。戦国乱世に処した錦・綾の織手たちも都の荒廃するにつれて京都をあとにするものが続出し奈良・堺の町に入る。戦乱後、西陣の地に織手があつまり西陣機業の礎をきずき、広幅の織機の操作も行なわれるようになった。また航海術の発達と造船技術の進歩により大陸との交通貿易は飛躍的に発展した。日・明貿易対鮮貿易により明代染織の流入、我國の染織に大きな影響を及ぼした。しかし織金・紵子・印金・平絹等の大陸織物の伝来によって刺激された我國の織物もこの時代にはまだ金襴緞子を

模倣する域に達していなかった。

安土桃山時代に入ると日本文化と大陸文化が、あるいは貴族文化と庶民文化とが融和しはじめ西欧文化の刺激をうけ、庶民文化の性格を反映して豪華にして規模雄大な文化が展開する。服飾の着装構成はほとんど前時代のままである。小袖が表着として公服化したこと及び全身着化したことは衣服の発達史上の意義がある。それは本来肌着的位置と構成をなしたものが表着として最高の段階にいたりついたことを意味し、以後・地質紋様が表着にふさわしい品質と装飾性を要求するようになり、内衣として不自由な制約をうけていた袖の部分が構成上大きな変化発展をとげることが約束される。更に全身着化したことは下半身をおおうものが不必要となり袴が不要となり逆に帯が不可欠のものとなった。それに応じて小袖の下に着られる内衣にも変化がおこることになり衣服の二部形式がやぶれる。この時代の小袖は手を通す上の部分をのぞいて袖口がまるくぬわれ、色彩文様も時代風潮を反映して独得の風格をみせている。

奈良時代下着としての小袖である汗衿は肩幅9寸3分、前幅1尺2寸4分、衿幅、上4寸2分、裾7寸、袖口7寸4分、7寸5分、8寸5分、袖付け9寸8分、袖幅1尺7寸3分である。平安時代の肌衣である衲は領盤式・広袖の仕立てであることからその衣服の性格の違いを観ることができる。

戦国時代も終わり徳川の江戸幕府は支配体制を確立発展させ、封建社会機構を樹立する。泰平の時代を背景に庶民的近代文化がいちじるしい発展をとげ、士農工商・家長絶体権力の家族制度等近世封建身分社会の成立発展は政治・社会の変遷のうちに町人勢力勃興による封建社会そのものの変質であった。都市の発達、商工業の進展は商人階級の経済力を増強し、商人の固定した身分制度の実質的変貌を意味した。江戸時代の文化ないし生活風俗はこうした社会の基礎体制及びその変化に対応して特色ある発展を示している。この面で経済的実権を握りながらその反面身分的・社会的進出をおさえられてい

た町人達のはたした役割は大きく、その豊かな財力を衣食住等の生活面や趣味の追求にそそぎ、その結果特色ある町人生活風俗を生み、また歌舞伎・浮世絵などの芸術面でも独自の文化を形成した。特に服飾はありあまる財力のほけ口の一つであり、花街や劇場などの影響をうけ、新しさをきそい贅をつくして新様式・新文様をつくりあげるとともに、一方実生活に適應した種々の機能的・実用的庶民服を生み出した。更にこの庶民の贅を禁止する意味で奢侈禁止令が出されたが、これがかえって服飾面に粋・渋好みを生みだし、被服縫製からも、着装構成の面からも新しい面を生みだしていった。公家・武家等支配階級には新しい構成をみることはできない。小袖の形は着装上の変遷をみることはできないが構成上にその変化をみることができ。小袖の変遷は衿・袖丈・袖幅・身丈・身幅・ふき等の長短にみられる。袂は袖に向かって弧形を描き、袖口には「ふくり」という別布をつける袖口8寸以下である。襟は襟首のところから末端にいくほど広がっている。裾は表裏ともに同尺で毛抜き合わせのふきなしであるといわれている。身幅は非常に広く、また袖つけが袖丈いっぱいの際は袖つけから袖口にいたる線は斜めの直線が弧線となるが袂を豊かに見せるために自然と袖つけをすくなくし、ここに「ふり」というものができたのである。小袖の袖丈は万治頃には1尺5寸、それより30年後には2尺、京保頃には2尺4寸～5寸、宝暦以後2尺8寸～9寸となった。これは小袖が最上層となると同時に袴をはずし一部形式になることにより袖が装飾的要素をなしてきたためである。更に袂の形は初め薙刀形のそぎ袖、その円が小さくなって文化以前は大円茶碗形、喜永頃には小銭がその標準となる。これは袖丈の変化により、袖丈が長くなると当然袂のくりを大きくしては袖の構成美を失うためにだんだん小さくしたものと思う。腋あけは古くは開けなかったが一般には文政頃は2寸、嘉永頃は1寸5分位あけるようになり、袖のふりは3寸5分、ふきも次第に大きく1寸5分～6分となり嘉永頃は初

装用1寸5分、略装1寸であった。これは小袖装束が室町時代に全身着となり子供用として袂の長いふり袖、大人用として袖丈短かく袖口の小さいものであった。このことで袴が不用となり女子の帯の表面化は帯と小袖構成内容の発達的基础となった。江戸時代になると表着に合わせて各種内着・下着・胴着・襦袢が統一される。縫製では袖口に他の裂地をもって縁どった袖覆輪の仕立てが新しく加わり、更に大きな袖口に針金を入れた丹前風な仕立てがでてくる。全体の形式としては初期は身幅が広く下半身を充分につつむが中期より次第にせまくなって現在の和服への流れを示してくる。小袖の全身着化にともなって帯の発達がみられ、袖と共にその美観を構成する重要な部分となった。江戸時代以前の帯は胴をひとめぐりする短いものが、女帯は幅広く、丈の長いもので小袖を身体に結びつけ、その形態をたもつ実際の機能をもつもので、下半身の着くずれを防ぐものへと変わっていった。その幅は初期2寸5分位から元禄頃には4寸、更に5寸6寸と広がりお太鼓帯が流行の文化文政の頃は1尺5寸幅のものも作られ、一般は8・9寸位である。長さは初期は6尺5寸のものが中期には1丈2尺になり、帯が小袖を身体に結びつける機能的目的だけでなく装飾面の要素を多く含むことにより丈・幅がだんだん広く長く変わっていった。一方男性用帯は実用性の域を脱せず長さは6尺5寸から1丈位まであり、幅は4・5寸位で普通は2・3寸位のものが用いられていた。袴の肩のはりは5・6寸が元禄には1尺、更に肩先の降るところに鯨のひげを入れてピンと張った形にした。また肩を斜めに、後をまるくそぎ、軍扇の如き形のカモメ仕立てが流行した。

安定した経済力と生活を背景に庶民服は種類・文様・地質あるいは活動性・機能性といった面でも発展を示しその豪華絢爛なもの上級服たる公・武家服を凌駕するものさえある。また生活の実際に応じて成立した各種平常着・仕事着などはそのまま現代和服の諸様式に結びつき直接的基礎になってくる。それには羽織・袴・

合羽・被風・半天・法被・浴衣・襦袢・前垂・股引等がある。

江戸前期の裁縫の主たるものがぼろつぎ作業であったにすぎない。この作業の展開の一つとして織目のあらい裂地や表裏二枚重ねたものを縦横に刺しつづけて事前に補強工作を施してから単仕立てにして着物に縫い上げることが行なわれた。これは織布の布目を拾って刺すもので編むことと織ることと縫うことがまじりあっている。これは補強・保温のために裂地をととのえる方法で防暑にも役立つ。特に肩のまよいを防ぐために肩から背部にかけて刺子で美しい模様を描き出す技術が進歩した。江戸時代に木綿が麻にかわる大衆衣料として普及した。これは紡績繊維として麻よりすぐれていたため急速に発展した。最初に木綿を使用したのは糸としての性質によるものではなく当時唯一の防寒衣としての綿入れ用としてであった。木綿の渡来以前において庶民の冬着は麻布を何枚か重ねて刺子とするか、あるいは袴の間に蒲の穂を入れるかして寒さを防いでいたのである。中入れ綿としての用途がまず確立して木綿の栽培がひろがり、ついで紡績して綿糸として織物を織るようになったとみるべきである。

小袖の全身着化にともない小袖の外観を決定する主条件を装飾文様の改良変化にもとめたため、地質は多種多様、色目は新しい流行色、文様は題材の自由・配置の自由・表現の奇抜さ等、文様の配置する面の拡大により図柄の表現をきわめて自由・絵画的印象の強いもので、技術的な面では友禅染の完成をみた。織物技術は技術改良により絹織別、綿織物の生産地の激増をみた。

明治維新は封建的な旧習を一掃し欧米文化を推進した反面、種々の混乱を起こし文化・生活の領域において和洋混淆の奇妙な現象を生じた反面、産業の発達・産業革命・資本主義体制の確立・発展をみた。文化生活の和洋混淆は衣服の面にははっきり現われた。開国による西欧衣服の流入、それに付随して起こる和服の動行の面にある。

被服構成学の生成

西欧衣服はその実用性が注目されて兵士服・職業服・一般男子の礼服等から普及化の一路をたどる。女子服の洋服化は礼装からはじまり教師・生徒から洋装を採用された。洋装は上流服から中流服、男子服から女子服へ、都市より地方へ、礼装から一般服へ、執務・勤務服から平常用へと移行したが戦前までの一般衣服生活は和服の伝統と形式を主体に動いている。昭和時代に入り西欧衣服様式がますます決定的になる一方、根強い和服への愛着も種々部分的变化をみせながらいまなお生きている。衣服形式と戦争は関係が深く、日華事変まで前代からの頹廢的空氣のこり超ロング・スカート等がでていたが、第三次世界大戦勃発により衣料面の制約とともに国民服令がだされ仕事着・作業着、例えばモンペ服が奨励された。これは衣服の実用性・機能性・合理性とみることができるが、政治的圧力のもとでなされた点は注目しておかなければならない。第二次世界大戦敗戦後、衣料の自由を背影として米国の影響を受けながら、住居の洋風化、生活の合理化にともなって洋服の浸透がいちじるしく戦前以上の豊かさで発展を示している。

紡績技術は道具から機械化へと進む。明治維新を境とした日本と西洋との技術の差は大きく急激な移殖は混乱を生じた。それは旧来技術の伝統の断絶と移殖技術のみによる再出発の形を生じ、それは綿紡績技術の移殖・蚕丝技術の移殖・羊毛紡績・紡績技術の移殖にみられる。織物における西洋技術の移殖は紡績・製糸部門とは対照的に織物部門においては在来技術の上に西洋移殖技術が消化されて連続的な発展がみられる。更に西洋染色技術の移殖は明治初期に移殖された外国機械技術の体系を基本としつつ模倣にとどまらず独自の発明改良を加えていった。これら衣服材料の発展は、西洋衣服の発展と同時に発展し、材料が衣服形式、縫製技術の発展をうながし、あるいは衣服構成が新しい材料の発展をうながす相互間の関係をみることができる。このことは繊維の工業化と共に化学繊維の開拓と発展にともない、その繊維にあう縫

製技術が試みられ更に合成繊維の発展は衣料生活をより豊かにしていった。更に天然繊維に加工技術等織物自身への加工技術が開発された。

縫製縫断は和装は「裁縫早手引」「裁縫独稽古」により明治以前からの技術を現代につたえ、裁断・縫製の伝統的技術を踏襲している。洋装は新しい裁断・縫製技術を必要とした。それは新しく型紙裁断という体形に衣服の形を合わせて製図し裁断する方法である。これは最初神士服が主流に行なわれていた。これは洋服縫製書が男子服中心であったことからわかる。しかし鹿鳴館時代の女性服の流行は洋服裁縫書の中にも女性洋服の仕立てを不可欠のものとした。その後洋服裁縫私塾が開かれたことは洋裁教育史上みのがすことができない。また手操り機械針、足踏み機械針がこの頃より使いはじめられる。洋裁はその後個人教授から学校教育へ移行し型紙教育へ移行していった。同時にミシンに関する技術も開拓されていった。ここにたつて和装の発達と同時和服の縫製技術の発展をみ、洋装の輸入・発展は型紙技術、新しい縫製技術の発展をみ、和・洋両面の技術の流れを示していった。更に洋裁の技術は新しい繊維に合わせ、例えばジョーゼット、ナイロン等の縫製技術が考案される等、新しい高度の技術が生まれ、更に流行のシルエット等の変遷により、例えばブラウジング・ルックのためのブラウジング仕立て等構成形の維持のための高度の技術が生まれる。このように現在の被服構成技術は和裁・洋裁の両面からなり、更にそれらの技術分析のために被服構成学が生まれ、着装美のための服飾美学が生まれた。更に社会生活の合理化は衣料の大量生産にともない、商品として構成品を大量に生産する技術が生まれた。

被服構成への変化を被服構成の本質をなす着装構成及び材料の変遷ならびに、この背影をなされる社会・文化という両面の考察を中心として被服構成性格を発展的に把握をしてきた。

被服構成論に関する文献のうちには科学的構成法を評論するものは少なくない。その場合は被服管理・材料学と科学的構成法を同義に解して大体の論者は科学的構成学が被服構成学と解するのであるが、被服構成の発展は科学的構成法とまったく異なったものとして被服構成が生成したのか、それとも被服構成は科学的構成の展開であり、やはり広義には一種の科学的構成と考えるかいずれかであろう。構成形態全体をまず考えてそこにおける縫製技術、そこにおける科学的技術分析、そこにおける美的構成という考え方によって科学的縫製技術は位置づけられるであろう。したがってまず縫製活動が展開しその方法技術として科学的技術を理解する、この関係はもとより縫製が主であり、そこにおける科学的構成を部分的・手段的・技術的に理解することだ。たとえば被服全体の合理的活動、つまり縫製の合理化の一環としての科学的技術を理解する。被服構成の合理化の一手段として科学的技術が存する。被服における縫製が科学的に研究され、それが被服の実際の縫製・構成に適用されるにいたったのは被服の縫製の実体面においてそれへの必要性が強く生じて来た結果である。それは家政学における被服の発展によって生じたところのものである。以前の被服構成は経験と職人的熟練の上にたった。それが洋装構成の輸入、それにもなう縫製機械の輸入・発展により縫製技術が科学化されるにいたった。そこで縫製技術はもはや経験にもとづく職人的技能から離れて科学の基礎の上に築かれていった。成り行きの方法では被服の縫製はますます多岐になる。ここに縫製技術のみならず被服学についてもこれを科学的に行なうことが強く要請されて来たのである。この現実の主体条件の展開とその手段的要請とに促進された科学的被服構成学の展開がある。被服における縫製ないし構成の科学化はしたがって二つの根源すなわち主体的・手段的条件に帰因される。すなわち、被服及び被服材料の多様化と型紙裁断と大量生産の暫時的移行であり、それが一人の能力を以ってしては管理し得ない程

度に達するということである。分業は技術の発展と関連してますます細分化されるが、それは他面において総合化を必要ならしめるのであって、この分業化と総合化とをいかに統一せしめるかということが重要な問題となる。被服の範囲が拡大するにつれ多くの面を形成してくる。その質も複雑の度を増すのである。ここに縫製技術管理の面が技術面と区別された別個の面として縫製管理が登場してこなければならぬ。

現在のように高度の社会体制は和裁洋裁の専門的縫製者を発展せしめ、専門的縫製者は縫製管理の面を担う主体として縫製管理の科学化と、その合理的方式を展開せしめる条件となる。

被服構成の発展を主体・手段等の面から縫製管理の面まで含めて発展生成を説明した。結論するならば、被服において主体的には材料特にその材料と構成が中心課題となり、手段的には縫製方法、裁断技術が充実して衣服の構成観ならびに構成体が確立されて、それが更に数字的に合理的に分析されて、縫製及び縫製管理として生成しうるものである。被服構成の生成発展を理解するにはさらに進んでこの被服を位置づけているところの外部社会、経済の変遷・発展の生成を検討する必要がある。ただし、この外部的発展の関連で触れておきたいのは一つは戦争と被服構成・管理学の発展のことである。二次にわたる戦争の被服の形態の発展に影響したことはきわめて大きいものがある。したがってこの影響は材料——縫製——縫製管理の有機的關係、あるいは和装形式——和洋混淆形式——洋装形式の構成形式関は全体として有機的に発展させる原因とならず、その系列の一部に強く作用し、他は度外視したり、二つの面を別々に作用したりして、両者に関連づけることがなかつたり、きわめて色々の結果をしめした場合が多かった。これは被服がその自体自主的に構成内容の展開として生長したのではなくて外的権力が作用したため、そのときどきの必要、あるいは統制の目的のための立場から、ま

被服構成学の生成

まったく総合性と自主性のないものとして作用したのである。したがって例えば活動服として職場服は極端に発展したが、全体構成内容は度外視されたり、上層階級や、礼服には強く影響されたが、日常着はまったく度外視されたのである。かかる戦争のような外部的影響はいまや総合的視角から修正されつつある段階にある。

被服構成の発展は歴史的に記述するのではなくて、何が発展であり、どのようなことが発展を意味することかを知ることである。これを一言にしていえば被服構成学の体系が確立される。このことが生成論である。被服構成学が実践理論的な学問であるとみる立場からかかる生成論が意味を有すると解するからである。

この小論の準備にとりかかった時、さまざまな隣接科学の精緻な体系と方法論の示唆をうけ、その理解につとめた。その成果がこの小論に少しでも表われていれば望外の幸せと思います。

参考図書・文献

家政学原論	黒川喜太郎 著
家政学・家庭管理学	常見育男 著
家庭管理Ⅰ・Ⅱ	氏家寿子 著
家庭科教育法	氏家寿子 著
実験被服構成学	石毛フミ 著
被服学ハンドブック	日本繊維機械学会
家政学の根本問題	原田 一 著
日本紡織技術の歴史	内田星美 著
染色の歴史	三瓶孝子 著
古代の服飾	猪熊兼繁 著

文化服装講座(服装史)	江馬 務 共著 今 和次郎 共著
日本洋装百年史	遠藤 武 共著 石山 彰 共著
日本の美術 No. 26 服飾	日野西資孝編
No. 12 織物	西村兵部 編
No. 7 染	山辺知行 編
日本服装史	木楢禎夫 著
講座日本風俗史 1—12巻	雄山閣
職人の歴史	遠藤元男 著
歴世服飾考	故実叢書編集部編
体系日本史叢書—産業史Ⅰ～Ⅲ	豊田 武 編 児玉幸多 編 古島敏雄 編
生活史Ⅱ	森末義彰 編 宝月圭吾 編 木林 礎 編

家政学雑誌

第17巻第5号	鎌倉時代女装の遺品	
第18巻第3号	鎌倉時代女装の遺品	第2報
第18巻第4号	鎌倉時代女装の遺品	第3報
		栗原澄子 著
第18巻第4号	家政管理学の方法と概念論派	今井光映 著

社会科学の諸方法

M. デュヴェルジェ
深瀬忠一 訳
樋口陽一 訳

現代経営学基礎講座第一巻 古川栄一 編
高宮 晋 編

THE FUNCTIONS OF THE EXECUTIVE
BY C. I. BERNARD
CO-ORDINATION IN BUSINESS ORGANIZATION
BY MARY PARKER FOLLET,

経済分析の歴史 シュンペーター著

東畑精一 訳

人類と機械の歴史

S. リリー 著

小林・伊藤 訳

経営学の回顧と展望 P・R 第8巻 1号 山城章著